

形容詞語幹単独用法について ――その制約と心的手続き――

とがしじゅんいち
富樫純一（筑波大学）*

0. 問題の所在

現代日本語では、形容詞の語幹のみを発話する用法が、話し言葉を中心に多く見られる^{*1}。

(1)(とても辛いカレーを食べて) からっ。

(2)(暖かい部屋から屋外に出て) さむっ。

(1)(2)はそれぞれ、形容詞「辛い」「寒い」の語幹を発話している。このような用法の存在は、品詞論・語構成論の観点、あるいは感動表現分析の観点などから指摘されている^{*2}。しかし、この用法の持つ性質や特徴、発話上の制約については詳細に分析されておらず、例えば、

(3)(テレビドラマを見終わって) *かなしっ。

(4)(重要なアドバイスを貰って) *ありがたっ。

(3)(4)の「悲しい」「ありがたい」が語幹のみの用法を持ちにくい、といった点は説明ができていない。そして、語幹のみを発話することが有する意味・機能とは一体どのようなものだろうか。

本発表ではこの用法を「形容詞語幹単独用法」と呼び、現象の観察および制約の導出を試みる。

1. 考察の対象

まず、本発表で扱う範囲を明確にしておく。語幹単独の用法を持つ品詞には形容詞(イ形容詞)と形容動詞(ナ形容詞)があるが、議論の都合上、形容詞のみを対象とする。

「形容詞語幹単独用法」については、多少細かく規定する。語幹単独用法では、末尾に促音や長音要素が付加される。ここでは、語幹末尾に促音要素が現れるものを「促音型」、長音要素が現れるものを「長音型」と分けて考える。

(5) たかっ / たかー(たっかー)	たか
(6) うまっ / うまー(うんまー)	うま
促音型	非促音非長音型

また、語幹単独用法は語頭が低く、語末が高くなるイントネーションの型を持つ((7))。形容詞語

* jtogashi@lingua.tsukuba.ac.jp

*1 この用法は、今野(2005)が指摘するように関西方言が由来であり、共通語では主として若年層がよく使用する。本発表では共通語の内省をもとに考察を進める。したがって、話者によって用例の判断に差が生じる可能性が大きいことを予め注意しておく。

*2 三上(1953)、三上(1959)、飯豊(1973)、今野(2005)、笹井(2005)、笹井(2006)など。

幹単独用法はこのイントネーションの型も組み込んだ形での用法といえる。なお、非促音非長音型ははっきりとした上昇も下降もないので、ここでは語幹単独用法と位置付けない。

(7) たかっ / たかー (たっかー)

議論が煩雑になるのを避けるため、本発表で中心的に扱うのは「促音型」のみとする。「長音型」については(補足的には取り上げるものの)対象としない。

2. 現象の観察

2.1. 現象の観察 1 形態的な観点

素朴な直観として、語幹が2拍の形容詞が語幹単独用法を持ちやすいと感じられるが、3拍以上でも許容されるものがある。ただし、1拍のものは許容されない^{*3}。また、語末が“ooi”となる「遠い」「多い」は語幹単独用法の許容度が下がる。

(8)(自分の給与明細を見て) すくなっ。

(9)(真新しい電灯をつけて) あかるっ。

(10)(ベルトの長さが足りず) みじかっ。

(11)(財布がなくなっていて) *なっ。 (←無い)

(12)(コーヒーを一口飲んで) *こっ。 (←濃い)

(13)(演技がうまいのを見て) *よっ。 (←良い)

(14)(地図で駅の場所を見て) ?とおっ。 (←遠い)

(15)(山盛りのご飯を出され)??おおっ。 (←多い)

このように、ある程度の形態的・音韻的制約はあるものの厳密ではなく、それ以外に意味的・機能的な側面が強く関わっていると考えられる。次節以降では、その観点から観察を進める。

2.2. 現象の観察 2 形容詞の意味による用法の可否

語幹単独用法の典型は次のようなものだろう。

(16)(カレーを一口食べて) からっ。 / あまっ。 / にがっ。 / まずっ。

(17)(売り物の茶碗を見て) たかっ。 / やすっ。 / でかっ。 / ちっちゃっ。

(18)(時計を見たら約束の時間を過ぎていて) やばっ。

便宜的に、形容詞の意味を属性・感覚・感情の三つに分けて考えてみると、語幹単独用法を持つことができるのは、主に感覚形容詞((16))と属性形容詞((17))である。(18)「やばい」のような感情

*3 語幹が1拍のものは「低高」型のイントネーションの型に当てはめることができないため、許容されないと考えることができる。したがって、多少長めに発音すれば、「こっ」等は若干許容度が上がる。

形容詞が用法を持つのはまれで、「こわい」「懐かしい」「惜しい」などに限られる^{*4}。

- (19)(展望台から眼下を見下ろし) 　こわっ。
- (20)(展望台から母校を見つけて) 　なつかしっ。
- (21)(展望台から山の緑を眺めて)??うつくしっ。
- (22)(展望台ではしゃぎまわって)??たのしっ。
- (23)(展望台までの階段を上って)??つらっ。
- (24)(新機能を備えた商品を見て) 　*あたらしっ。
- (25)(二本の線の長さを確認して) 　*ひとしっ。

とはいえ、属性形容詞でも許容されないものがあるので((24)(25))、いわゆるシク活用という形態的な制約であるとも考えられる。が、ひとまずこれらを例外的なものと位置付け、語幹単独用法の可否は基本的に形容詞の持つ意味の違いによると捉えたい。

属性・感覚形容詞に偏ることから、語幹単独用法は外界からの刺激、つまり「外的徴証」(金水(1990))が直接的なきっかけとして必要といえる。「カレーを食べること」「茶碗を見ること」「時計を見ること」といった外的な事態の認識である。逆に、感情形容詞は「内的徴証」の典型であるため、語幹単独用法を持てないのである。(19)(20)の「こわい」「懐かしい」は眼下や母校という外的なものが情動のきっかけとなるので許容されるのだろう。

2.3. 現象の観察 3 事態の認識についての制約

さらに、語幹単独用法は「今ここ」における事態の認識が必須である。今野(2005)が「発話時に密着した直感的な感覚」と述べているように、外的なきっかけを認識するタイミングが現場的、即時的でなければ、語幹単独用法は使えない。

- (26)(先週食べたカレーを思い出して) 　*からっ。
- (27)(去年の試験の点数を思い出して) 　*ひくっ。
- (28)(朝から膝がズキズキとしていて) 　*いたっ。

これらの例を見ても分かるように、過去の認識や継続的な感覚は語幹単独用法で表すことができない。過去の認識が今生じたかのように表現する場合には多少許容度が上がるが、それも「今」という場面制約が利いているからに他ならない。その意味では、笹井(2005,2006)が指摘するとおり、語幹単独用法は感動表現とほぼ同質の表現と位置付けられる。

*4 感情形容詞については、「美しい」「楽しい」の他、「恥ずかしい」「くやしい」など、話者によって許容度に差があるものがある。

(a)(失敗をしてしまって) ?はずかしっ。／ ?くやしっ。

笹井(2005)でも「かわい」「うれし」といった実例が挙げられている。しかし、本発表では典型例と比較して相対的に許容度が下がるものと捉える。

促音型と長音型との比較から、もう少し細かく見てみよう。

(29)(シャワーの温度がじわじわと上がっていき) あつつ。／ あっつー。

(30)(ズボンを穿こうとしたがサイズが合わずに) きつつ。／ きっつー。

(29)の場合、たとえ温度上昇の度合いがゆっくりだとしても、促音型「あつつ」が指し示す「熱さ」は主観的な基準点を越えた瞬間の熱さであり、瞬間的な認識である。一方、長音型「あっつー」に瞬間性はない。(30)も同様で、最初に「きつい」と感じた瞬間には促音型「きつつ」であるが、苦勞して穿いた後の感覚は長音型「きっつー」となる。したがって(促音型の)語幹単独用法は、「切迫的把握」(仁田(1997))とでもいえる事態の瞬間的な認識が必要といえる。

では、外的徴証と瞬間性はどちらが優先されるのか。

(31)(忘れ物をしたのを思い出して) やばっ。

(32)(徹夜明けで耐えられなくなり) ねむっ。

(31)(32)には、外的なきっかけが見られないが、語幹単独用法としては自然な表現である。この場合、忘れていたことを思い出す、眠気が限界を越える、という瞬間的、突発的な認識の変化が認められる。ここから考えると、語幹単独用法において優先されるのは、事態の認識の瞬間性(突発性)であり、瞬間性を有しやすいのが外からの情報(心内に無かった情報)であるといえる。

2.4. 現象の観察 4 伝達の側面

感動表現という位置付けと関わるが、語幹単独用法は聞き手への伝達的な意味合いが非常に希薄である。活用語尾を含んだ基本形と比較するとその違いがはっきりする。

(33)(道路に飛び出した子供を見て)

あぶなっ。／ あぶないっ。

(34)(友人と駅で待ち合わせ。友人が遅れて改札から出てきた)

おそっ。／ おそいっ。

(33)(34)では語幹単独と基本形のいずれもが可能である。しかし、若干のニュアンスの違いが読み取れる。語幹単独用法のほうは、自身の判断を表出しているだけで、「あぶないということ」「遅いということ」を聞き手には伝えていないと解釈できる。

それに比して、基本形には伝達の意識が認められる。子供や友人(=聞き手)が話し手の存在に気付いていないとすると、「あぶなっ」「おそっ」のほうがより自然であろう。次の(35)も同様で、店員に料理の味を伝えるという解釈が出やすいのは「まずいっ」「うまいっ」である。

(35)(店で新作の料理を食べる)

店員： お味はどうですか？

客： まずっ。／ まずいっ。／ うまっ。／ うまいっ。

「まずっ」「うまっ」のほうは店員(=聞き手)の存在に関係なく、単に自身の判断を表出しているだけである。そのため、コミュニケーション的には多少不自然な表現になる。

2.5. 現象の観察 5 対象の明示

属性・感覚形容詞の対象については興味深い現象が観察される。語幹単独用法における対象は、笹井(2005)が「感動の対象は形式に示されず」と、明示されないことを指摘したが^{*5}、実際には対象名詞が現れることができる。

- (36)(とても辛いカレーを食べて) (この)カレー、からっ。
- (37)(売り物の茶碗の値札を見て) (この)茶碗、たかっ。
- (38)(数十年ぶりに母校を訪ねて) (この)教室、なつかしっ。

これらは「カレー」「茶碗」「教室」という対象が明示されているが、特に不自然ではない。さらに、明示される対象は必ず無助詞になるという制約がある。

- (39) カレー [φ / *が] からっ。
- (40) 茶碗 [φ / *が] たかっ。
- (41) 教室 [φ / *が] なつかしっ。

今野(2005)によれば、語幹単独用法では時制辞(活用語尾)が欠けているために主格が標示できないという^{*6}。しかし、次の例のように、いわゆる「ハーガ」構文を語幹単独用法にすると、主格だけでなく主題のハも必ず脱落するため、一概に統語的な要因によるものとは言い難い。

- (42) (この)象、鼻、ながっ。
／ * (この)象は鼻がながっ。／ * (この)象は鼻、ながっ。／ * (この)象、鼻がながっ。
- (43) あいつ、足、おそっ。
／ * あいつは足がおそっ。／ * あいつは足、おそっ。／ * あいつ、足がおそっ。

無助詞制約の強さについて何らかの説明が必要であるが、詳細は今後の課題としたい。

2.6. 現象の観察 6 語幹単独はどこまで‘単独’か

形容詞は接頭辞が付加されることによって派生的な意味を表す形態を作ることができる。それらの派生形容詞は語幹単独用法を持ちにくい。

- (44) くらっ。 / *うすぐらっ。 (←薄暗い)

^{*5} 三上(1953:143-144)も「語幹用法の『ア痛! ア熱! オウ寒!』の如きは「何処ガ」とも「何ガ」とも言添える余裕のないものである」と指摘している。

^{*6} 加えてこの用法を、小節(small clause)が主節を成す不完全な構文と位置付けている。

- (45) はやっ。 / ??すばやっ。 (←素早い)
 (46) よわっ。 / *かよわっ。 (←か弱い)
 (47) きたなっ。 / *こぎたなっ。 (←小汚い)
 (48) すっぱっ。 / *あまずっぱっ。 (←甘酸っぱい)

(44)～(48)は総じて接頭辞を付したもののほうが許容度が低い。これは接頭辞により形容詞の意味に何らかの程度性が加わったためといえる。つまり、語幹単独用法は、属性や感覚そのものの判断とは合うが、属性や感覚の度合い・内実の判断とは噛み合わないのである。

ただし、これには例外がいくつか考えられる。

- (49)(週刊誌を手にとったらいつもの3倍の厚さで) ぶあつっ。 (←分厚い)
 (50)(弁当を開けたらウインナーが3倍の大きさで) ばかでかっ。 (←馬鹿でかい)

(49)(50)は接頭辞が付いているが問題なく自然である。程度の著しさを示す場合、その程度の内実よりも著しいことそのものに焦点が当たるためといえる。もちろん、程度が著しいからといって、単に副詞を添えただけでは許容されない。

- (51) *とてもながっ。 / *すごくはやっ。 / *かなりまずっ。^{*7}

なお、形容詞自体が接尾辞となる複合形容詞の場合、語幹単独用法が許容されやすい。

- (52) このステーキ、食べやすっ / 食べにくっ / 食べづらっ。
 (53) このチャーハン、水っぱっ。 (←水っぽい)
 (54) *ステーキ、食べたっ。 (←食べたい)^{*8}

3. 用法の考察

3.1. 用法の制約

2節での観察をまとめると、語幹単独用法の制約は次のようになる。

- (55) 瞬時的・現場的な事態の認識に限られる(結果的に事態は外的なものが多い)
 (56) 程度や度合いの判断は加わらない
 (57) 非伝達の

ただし、制約の全てをクリアすれば必ず語幹単独用法になるというわけではない。

*7 「超」や「めっちゃ」等の口語的な副詞を用いると、いくらか許容度が上がる。

(a) 超ながっ。 / めっちゃうまっ。

副詞とはいえ、「ぶあつっ」「ばかでかっ」に近い振る舞いをしているものと思われる。

*8 三上(1959)では「ーたい」の語幹単独用法が用例として挙げられている(「アァ、水ガ飲ミタ!」)が、現在の内省では、(主格が標示されていることも含めて)おそらく許容されないだろう。

3.2. 形容詞語幹単独用法の背後にあるもの

形容詞そのものに主観的な判断・把握が認められるので、語幹単独用法も瞬間的とはいえ、ある程度の判断手続きが背後に存しているといえる。属性や感覚の種類といったものは区別できている。事態の認識だけではなく、事態の特質の把握まで処理が進んでいることになる。

その意味では、「あっ、忘れ物！」のような単純な事態の認識を示す表現と異質といえる。この異質さは感動詞を用いることでより明確になる。

(58)(カレーを食べて) ??あっ、からっ。 / うわっ、からっ。

(59)(屋外に出てみて) ??あっ、さむっ。 / うわっ、さむっ。

(60)(懐メロが流れて) ??あっ、なつかしっ。 / うわっ、なつかしっ。

語幹単独用法は「あっ」よりも「うわっ」としっくりくる。「あっ」と「わっ」の違いについて冨樫(2005a)では、「あっ」が単なる「変化点の認識」を示し、「わっ」は認識した上でのより複雑な(半活性情報も関わった)心的手続きを背景に持っている指摘した。語幹単独用法が「わ」系感動詞と相性が良いということは、変化点の認識(情報獲得のポイント)ではなく、認識後の何らかの手続きと対応していると考えられることができる。

2節の観察からは、内的徴証に関わる感情形容詞や程度性が加わった派生形容詞は語幹単独用法を持てないことが分かった。つまり、事態認識後の判断の度合いが強くなればなるほど、語幹単独用法の許容度は低くなる。しかし、感動詞との相性を見ると、必ずしも単なる認識のみに対応しているわけでもない。

ある事態を認識・把握した後で判断が加えられる。その判断にもとづいて何らかの情動が起こる。

(61) 認識 → 判断 → 情動

このような心的手続きの過程を仮定すると、語幹単独用法は「判断手続きへの到達」、かつ、判断の未完了の時点を示すと考えられる。判断の内実やその後の情動とは関わらない。が、「カレーが辛い」といった事態そのものの把握は完了しているので、「あっ」より「わっ」に近いのと並行的に、認識よりは判断に限りなく近い。さらには、語幹単独用法が「意外性」(冨樫(2005a))というニュアンスを表出しやすいことも「わ」系感動詞との近接性から説明できる。

これによって語幹単独用法が十全に理解できるとは言えないものの、少なくとも典型的な例については捉えることができるだろう。

感動詞との絡みで例外となるのが「痛い」である。

(62) あっ、いたっ。 cf. あいたっ。

(62)が自然なのは、感覚形容詞「痛い」が触覚の瞬間的な認識を示すためである。(一定量の)刺激があったことのみに対応するので、「あっ」との組み合わせでも問題ない。個々の形容詞の意味的な相違により、その心的な位置付けは変わってくる。「痛い」「熱い」などは認識寄りの形容詞、

「懐かしい」「こわい」などは感情形容詞とはいえ、判断寄りの形容詞といえるかもしれない。

また、判断手続きの段階性が前提となるため、もともと程度性を内包しない「ない」「等しい」「正しい」などは、判断への到達＝完了となり、一足飛びに手続きが移行する。そのため、語幹単独用法が持てないと考えられる。

4. 発展と課題

単なる事態の認識でもなく、情動の表出でもない。形容詞語幹単独用法は、事態の認識から情意の発動に至る心的手続きの中間段階と密接に対応している。

本発表での分析は、さまざまな観点で発展していく可能性がある。

(63) 促音型と長音型の違い・あるいは長母音型(「いたっ」→「いてっ」)との関係

(64) 形容動词语幹・名詞一語文への連続性

(65) 形容詞の意味分類・感動詞の意味機能

もちろん、現象のより詳細な観察も進めていかなければならない。

参考文献

- 飯豊毅一(1973) 「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」『品詞別日本文法講座4 形容詞・形容動詞』, pp.164-207, 明治書院.
- 尾上圭介(1986) 「感嘆文と希求・命令文 —喚体・述体概念の有効性—」『松村明教授古稀記念 国語研究論集』, pp.555-582, 明治書院.
- 尾上圭介(1998) 「一語文の用法 —“イマ・ココ”を離れない文の検討のために—」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』, pp.888-908, 汲古書院.
- 金水 敏(1990) 「述語の意味層と叙述の立場」『女子大文学 国文篇』41, pp.26-56, 大阪女子大学国文学科.
- 今野弘章(2005) 「イ落ち」『日本英語学会第23回大会ワークショップ「多角的視点からのインターフェイス研究に向けて」』ハンドアウト.
- 笹井 香(2005) 「現代語の感動喚体句の構造と形式」『日本文藝研究』Vol.57, No.2, pp.1-21, 関西学院大学日本文学会.
- 笹井 香(2006) 「現代語の感動文の構造 —「なんと」型感動文の構造をめぐって—」『日本語の研究』Vol.2, No.1, pp.16-31, 日本語学会.
- 定延利之(2005) 「日本語のイントネーションとアクセントの関係の多様性」『日本語科学』17, pp.5-25, 国立国語研究所.
- 寺村秀夫(1982) 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.
- 富樫純一(2005a) 「驚きを伝えるということ —感動詞「あっ」と「わっ」の分析を通して—」『シリーズ文と発話第一巻 活動としての文と発話』, pp.229-251, ひつじ書房.
- 富樫純一(2005b) 「「へえ」「ほう」「ふーん」の意味論」『言語』Vol.34, No.11, pp.22-29, 大修館書店.
- 西尾寅弥(1972) 『国立国語研究所報告44 形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版.
- 仁田義雄(1997) 「未展開文をめぐって」『日本語文法 体系と方法』, pp.1-24, ひつじ書房.
- 三上 章(1953) 『現代語法序説』刀江書院. (1972年くろしお出版より復刊)
- 三上 章(1959) 『構文の研究』東洋大学博士学位論文. (2002年くろしお出版より刊行)
- 森山卓郎(1997) 「一語文とそのイントネーション」『文法と音声』, pp.75-96, くろしお出版.